

加藤卓男（1917-2005）

幸兵衛窯の代表的な陶芸家といえば、6代目当主の加藤卓男だろう。1995年には「三彩」の再現が評価され、人間国宝に認定されている。

卓男は、古代ペルシャ陶器に使われていた低温の釉薬、たとえば玉虫色のラスター彩や、ペルシャブルーと呼ばれるほど西南アジアに縁の深い、濃い青色に大きな関心を寄せていた。彼はこの研究のために、イランやイラクなど海外にも足を運んだ。帰国後、試行錯誤の末に多くのペルシャの釉薬を再現し、ラフなフォルムやネガティブスペースといった日本的な要素と融合させた。

卓男はこの歴史的な様式の再現の成功により、宮内庁から注目を受けることとなった。奈良の正倉院には、8世紀の三彩陶器が所蔵されていたが、その制作方法は失われていた。1980年、宮内庁は卓男に三彩の釉薬を再現するよう依頼し、9年間にわたる入念な研究を経て、彼はその成功を収めた。卓男は87歳で亡くなるまで、ペルシャの深く豊かな色彩と日本美術のフォルムやイメージを融合させた印象的な作品を発表し続けた。